春には春の花が咲く

さとう　そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春には春の花が咲く

【Ｎコード】
Ｎ３００６Ｉ

【作者名】
さとう　そら

【あらすじ】
僕である優一の成長物語である。
子供の頃に体験をした心の傷を抱えながら、男として人として成長をしていく。
幸せについて、愛について、僕なりの答えを見つけていく物語。

新月の闇の中で、無数の星がきらめき、頭上に星の川を作っていた。
僕は、砂浜に腰を下ろし空を見上げた。
闇の中に、波の音が聞こえてくる。

ときに遠く。
ときに近く。
波の音は、僕を海の中に誘うように聞こえてくる。
小学5年生だった、僕は、波の音を聞きながら、昔、母親に聞いた話を思い出す。
『夜空に浮かぶ星の一つ一つが死んだ人の魂』なのだと。
『死んだ人の魂が、空に浮かび、夜、みんなが安心して眠れるように、僕たちを見守ってくれている』のだと。

かくれんぼ　優一編

新月の闇の中で、無数の星がきらめき、頭上に星の川を作っていた。
僕は、砂浜に腰を下ろし空を見上げた。
闇の中に、波の音が聞こえてくる。
ときに遠く。
ときに近く。
波の音は、僕を海の中に誘うように聞こえてくる。
小学5年生だった、僕は、波の音を聞きながら、昔、母親に聞いた話を思い出す。

『夜空に浮かぶ星の一つ一つが死んだ人の魂』なのだと。
『死んだ人の魂が、空に浮かび、夜、みんなが安心して眠れるように、僕たちを見守ってくれている』のだと。

星が霞んで見える。
涙で、星が霞んで見える。
僕は、涙で霞んだ瞳で、無数に煌く星の中から、妹の星を探した。
一昨日に生まればかりのはずの星を探した。
妹は、まだ、小学校1年生だから、きっと、まだ、小さな小さな星だと思う。
どれだか分からなかった。
きっと、妹の瑞希の星は、小さすぎて、どれだか分からないのだと思う。

不意に僕の心の中に悔やんでも、悔やみきれない思いが湧き上がる。
誰を、憎んでいいのか分からない怒りのようなものが湧き上がってくる。
苦しい。

苦しい。
ただ、ただ、苦しい。
僕は、まだ、これ以上の言葉で心の中を表現することが出来なかった。
瑞希は、たった一人で、暗い病室の中で、誰とも分かち合うことが出来ない苦しみに耐えていたのかと思う。
涙が一筋頬を伝った。
暗闇の中で、頬を伝い流れ落ちた涙が砂浜を濡らす。

『お兄ちゃん。ごめんね。
お見舞いに来てくれたのに。
私、苦しくてお話出来なくて、、、
お兄ちゃん。ごめんね。』

瑞希と最後に交わした言葉が、波の音に混じって聞こえてくる。

瑞希のお葬式が終わり、小さな棺が火葬場まで運ばれた。
僕は、ずっと、瑞希の遺影を抱えていた。
どんなに重くても、僕は、ずっとそれを抱えていたかった。
火葬場に着くと棺は鉄の台車に載せられて、炎の部屋へと閉じ込められ蓋が閉じられた。
誰かが、拝んでいた。
誰かが、すすり泣いていた。
父親が、泣き崩れそうになる母親を支えていた。
僕は、涙が出なかった。
参列者が涙を流す中で、僕は、遺影を抱えたままじっと立っていた。
感情や想いを、全て心の奥底に仕舞込んだ。
何も考えることが出来ずに、炎の部屋を眺めていた。
耳だけが、何故か研ぎ澄まされ、読経に混じって泣き声が聞こえてきた。

やがて、瑞希は、真っ白な骨になり小さな壷に入れられた。
参列者のすすり泣く声が、まだ、続いている。
でも、僕は、理解していた。
みんな、明日になれば、笑顔になることを。

瑞希のお葬式が終わった日の夜に、僕は、家を抜け出してこの浜辺にやってきた。
家を抜け出すとき、父親も母親も、何も言わなかった。
僕も何も言わずに家を出た。
そして、瑞希と最後に遊んだ砂浜に僕は腰を下ろした。
僕は、一人になると、今日始めて涙を流した。
溢れ出した涙を、僕は、止める術を知らなかった。
涙に濡れた砂を手のひらですくい、砂浜に戻す。
そんな動作を無意識に繰り返した。

『お兄ちゃん。』
『お兄ちゃん。』

僕を呼ぶ声が波間から聞こえる。

『遊ぼうよ。』
『かくれんぼするから、私を探してね。』

瑞希の声が聞こえる。
僕は、立ち上がると、瑞希が隠れている海に向かって歩き始めた。

かくれんぼ2

僕は、瑞希とかくれんぼをするとき、いつも瑞希をゆっくりと探した。
瑞希が、隠れる場所はいつも決まっていた。
松林の横に何故か植えられている、躑躅(ツツジ)の木の後ろにしゃがんで隠れていた。
小さな身体を丸め膝を抱えて、息を殺して躑躅の葉蔭に隠れていた。
僕は、瑞希を探す振りをしながら、まっすぐにゆっくりと躑躅に近づいた。
そして、僕は、気がつかない振りをして、小さくしゃがんでいる瑞希の横を通り過ぎる。
そんな時、瑞希は、いつも声を殺し楽しそうに笑った。
その声は、完全に押し殺すことが出来ずに、風に乗って僕の耳に届いてきた。
僕は、その声が聞こえない振りをする。
躑躅の横を何度も行ったり来たり通り過ぎる。
やがて、瑞希は、焦れたように葉蔭から跳び出し『ここだよ!』と笑顔で言う。
顔中が笑顔でいっぱいになる。
『お兄ちゃんは、見つけるの下手なんだから!』自分がお姉さんになったような口調で、いつもそう付け加えた。

でも、今日は違う。
今日は、直ぐに見つけるよ。

「もういいかい。」僕は、いつもの様に目を閉じ、大きな声で言った。
『まあだだよ。』瑞希の声が聞こえた。

「もういいかい。」
『まあだだよ。』
「もういいかい。」
『もういいよ。』

瑞希の声は、いつもとは違う場所から聞こえてきた。
暗い海の向こう。
水平線の彼方から、海鳴りの音に混じって僕の耳に届いた。
何故、今日は、そんな所に隠れているんだ？
暗いだろ。
寒いだろ。
一人で寂しいだろ。
直ぐに見つけるから、一緒に家に帰ろ。
お腹が空いているだろ。
もう、一人で病院のご飯なんか食べなくていいよ。
久しぶりに４人で、お母さんの作った温かいご飯を食べよう。
大好きなＴＶも始まる時間だよ。

僕は、声が聞こえた方に向かって真っ直ぐに走った。
砂浜に運動靴が埋まり、よろけながらも、瑞希の声がした方に向かって走った。
運動靴が海水に濡れた。
それさえも、気にならなかった。
瑞希が星になる前に、瑞希を見つけなければ。
暗い水平線から、瑞希の星が昇る前に瑞希を見つけなければ。
僕の足は、波に絡まれ走ることが出来なくなった。
それでも、僕は、水平線に向かって走った。
海水の抵抗で、歩くよりも遅いスピードになった。
それでも、暗い海の中を、水平線向かって歩くように走った。

『だめ！』瑞希の声が、砂浜の方から聞こえた。
『そっちに行っては、だめ！』叫ぶような声だった。
僕は、その声で我に返った。
顔に波がかかる。
いつの間にか、胸まで海水に浸かっていた。
僕は、首だけで後ろを振り返る。
夜の闇の中、躑躅だけが、何故か明るく浮かんで見いた。

躑躅の木陰に瑞希はいなかった。
瑞希にはもう会えない。
初めて、僕はその事実を実感した。
もう会えない。
もう会えない。

『お兄ちゃん。ごめんね。
お見舞いに来てくれたのに。
私、苦しくてお話出来なくて、、、
お兄ちゃん。ごめんね。』

ちがう！
ちがう！
謝るのは、僕の方なんだ。
あの日、お見舞いに行く前に読んでいた漫画が読みかけだったから。
それを、母親に取り上げられたら。
だから、機嫌が悪かったのは僕の方だったんだ。
そんな、小さな自分の我儘のために瑞希と話をしなかったのは僕の方なんだ。
何で、お見舞いに行かなければいけないんだよと思ってしまったのは僕の方だったんだ。
あれが最後になるなんて。

もう、ずっと、さよならなんて。
会えないなんて。
僕の心は、耐えられなかった。
瑞希が何時もしゃがんでいた場所に、崩れるように膝をついた。
全身から声が出た。
叫ぶように泣いた。
身体中が濡れていることも忘れて泣いた。
心が千切れそうだった。

ごめんね！
ごめんね！

僕の心が叫んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3006i/

春には春の花が咲く

2010年10月14日15時48分発行